

難しいテーマで、正直に言ってアイディアが思い浮かびません。そこで、現在の私にとって大学生時代はどのように位置づけられるか、思い起こして書いてみることにしました。何か参考になるとよいのですが。

私は 横浜国立大学経済学部の試験を受け経済学部の学生になりましたが、何故横浜国立大学だったのか、何故経済学部だったのか、今振り返ってみて、よく分かりません。そもそも、経済とは何かが分かっています。

しかし、学生時代が現在の私に良い意味で大きな影響を与えていたことは間違いないと思っています。学生時代に現在の私が生まれたと言っても過言ではないかもしれません。

第1 に、人間とは何かを考え、るべき人間としてどう生きていくべきかを私なりに見つけることが出来たことです(そう思っています)。これは、私に、少なくとも、良い言葉で言えば、自信と勇気とを与えてくれていると思っています。これは、大学卒業後、これまでいろいろな場で生活をしてきましたが、現在も変わっていないと思っています。

これについては、授業や、同級生、先輩との話し合いがきっかけとなり、授業や、同級生、先輩との議論、それに、読書が栄養になったと思っています。

授業 は1~2年はいわゆる教養科目で、大学生が大学生として身につけておくべき知識及び識見の形成に重点が置かれていたように思います。問題提起型の性格もかなりあったように思います。経済や生活、日本や世界の問題点が人間とのかかわりで紹介されたり、また、経済に関する授業の多くで、授業内容の半分が価値をめぐる哲学論やイデオロギー論で占められていたという記憶が残っています。しかし、いずれにしても、授業が人間や人間とのかかわりで世の中を考えるきっかけの1つになったことは間違いません。

3~4年では、私なりに焦点の1つがはつきりしていました(もう1つ、後で述べる第2の焦点があり、これとあいまって)、授業の選択はそれほど迷うことなく、また、授業内容も、私なりに整理して理解できていたように思っています。

私は勧誘されて英語研究部に入りました。英会話の

トレーニングが部活動の主目的でしたが、これに加えて、人間や世の中について議論する勉強会がありました。トレーニングの後に行われることが多かったと記憶しています。また、年2回行われた合宿では、夕食後、こうした勉強会が開かれるのが恒例となっていました。

勉強会は、あらかじめ決められた書物を読んでおき、それについて議論するというもので、書物の題名は全てを思い出せませんが、「人間のしるし」(クロード・モルガン)、「世界の重み」(同)、「近代人の疎外」(パッペンハイム)、「鎖につながれた巨人」(ダンハム)、「現代の神話」(同)、「死の商人」(岡倉古志郎)、「日本の思想」(丸山真男)などでした。

同級生や先輩の話を聞いて、また、議論を通じて、人間や人間とのかかわりで世界を考えるきっかけができ、また、考えが深まったと思っています。

第2 に、世の中に対して問題意識を持つことができるようになりました。人間との関係においてです。これが、何故そうした問題が生じているのか、問題を解決するにはどうしたらよいかという意識につながりました。これが、行動面で、経済企画庁(現内閣府)への就職になりました。問題意識や解決意欲は今も持ち続けています。

これについても、授業や、同級生、先輩との話し合いがきっかけとなり、授業や、同級生、先輩との議論、それに、読書が栄養になったと思っています。

先ず、問題意識を持つことでしょう。世界のために日本のためにも。社会のために自分のためにも。どういう風に学ぶか一問題意識が明瞭で、問題認識が明確なら、答えの半分以上はひとりで出てくるでしょう。もし残りがあったら、相談に来てください。

小川 雅敏



MASATOSHI OGAWA

経済学部教授。

1942年東京生まれ。ジョンズ・ホプキンス大学国際問題高等研究所修士(国際問題)。専門は経済政策論。趣味は散策、旅行、庭いじりなど。議論なども大好き。

学びのアイディア
—こんな風に学んだら!—

はじめに

「こんな風に学んだら」というお題で文章を書くように言われて正直困りました。真っ先に思ったのは「こっちが聞きたいぐらいだ」です。おそらく高校までは、科目ごとに基本的な教科書があり、参考書があり、問題集の例題を解きそれを応用する、という形で「勉強」してきたと思います。ところが、大学で「学ぶ」ときには必ずしも、そういう方法がとれないのです。

「問う」こと

アメリカの代表的なお酒に「バーボン」があります。英語で書くと "bourbon" です。ところが、これをフランス語読みすると「ブルボン」です。フランスの王朝名だということに気づかれることでしょう。ここで「問い合わせ」が生まれます。なぜ、アメリカの酒の名前がフランスの王朝の名前と一緒になのか。また、とび職の方がよく履いている「地下足袋」は、どう見ても、地面より上で利用されています。

これらは、みな、きちんとした理由があり、尋ねたり調べたりすれば、わかることです。ただし、調べて「わかった」といって終わりではありません。ひとつわかると、またほかの「問い合わせ」が生えてくるはずです。

学びのアイディア
—こんな風に学んだら!—



中路 敬

KEI NAKAI

経済学部助教授。

1969年大阪生まれ。九州大学大学院経済学研究科博士後期課程修了・博士(経済学)。専門は経済学史。趣味は水泳、楽器、カクテル作りなど。

大学での学び

大学での「学び」と高校まで「勉強」とが違うということは、あきらかです。まず、大学での開講科目すべてに、「基本テキスト」があるとは限りません。つぎに、参考書や問題集も、利用しやすいものは、多くはありません。大学は、その意味では不親切な場所なのかもしれません。

なぜ、そうなのでしょうか。大学入試までは「学ぶ」=覚える、解ける、答えられる、だったものが、大学では「学ぶ」から「問い合わせ」ことが求められるからです。つまり、各講義に対応する「問題」集がないのは、自分で「問い合わせ」を見つけてくることが「始まり」だから、といつてもよいでしょう。

なんでも関心を持ち疑問を感じよう

大学で学ぶということは、答えを知る、知識を集めるだけではないのです。知れば知るほど、疑問が増えていきます。これが大学生であることの面白さであり難しさでもあります。しかし、それをサポートするために、本学ではたくさんの書物を備えた図書館があり、それぞれの専門家がそろっています。何か学んだら、率直な疑問を先生方にぶつけて見ましょう。どんな小さな疑問でもそれを解消し、また新しい「問い合わせ」に取り組んだ経験こそ、たんなる「知識」をこえ、のちに社会人となって生きてゆく上での「知恵」となるはずです。